

第V章 総括

億首川流域では過去、平成18～平成20（2006～2008）年度に億首川周流域における古墓調査（町内埋蔵文化財予備調査）、平成21～平成27（2009～2015）年度に億首川下流西先謝原の古墓（町内埋蔵文化財予備調査Ⅱ）、平成19～平成21（2007～2009）年度に億首川流域古墓群比嘉原地区（埋蔵文化財発掘調査）、平成25～平成26（2013～2014）年度にミーチェの古墓群（埋蔵文化財発掘調査）など継続して調査を実施し、延べ50基の古墓を確認記録している。これら複数の地点で確認された墓群や墓の造りかたをはじめ、墓の利用状況を考える上で億首川流域における古墓遺構の実態を把握する必要があった。本報告は、それぞれの成果をもとに過年度分の調査成果を併せて、下記の項目について整理・考察をし、まとめとした。

1. 億首川下流域の環境と遺構の立地について

億首川下流には、「ウククビ（奥首）」の地名をもつ川幅が狭まり、上から見るとくびれた地形がある。この「ウククビ」付近から河口までの低地には、沖積平野が広がり多くは水田や耕作地として利用され、河口近くにはマングローブ林などの自然環境が保全されている。地形は主に台地、段丘、丘陵、低地から構成される卓越した地域になっている。地質は億首川を境に右岸側は金武・並里集落が立地する琉球石灰岩台地が顕著に発達し台地上縁辺部は段丘斜面が形成され、左岸側は中川集落が立地する国頭礫層や嘉陽層が基盤となり、その上に琉球石灰岩が不整合に分布する丘陵台地が形成されている。両台地の縁辺部は低地の平坦部から高い所で標高差30m以上もある。

今回の悉皆分布調査は、これら台地に露頭する琉球石灰岩の段丘斜面や丘陵斜面一帯から古墓210基（岩陰墓29基、岩陰石積墓11基、岩陰掘込墓11基、掘込墓32基、仮墓6基、不明墓121基）をはじめ、石積み8基、不明遺構4基、道跡12箇所、坪所2箇所（名称不明）など、計222基と14箇所（合計236基）の遺構が確認された（表5.1）。古墓については、比嘉原地区やミーチェ地区で確認された古墓（遺構立地・構造形式）と同様の遺構であり、これらの一連の墓

群を包括して「億首川流域古墓群」と呼称している。

表5.1. 各地区の墓遺構分類別集計

	一ノ原	嘉陽原	一辺ノ原	南所台地原	臨巴ノ原	合計
岩陰墓	2	10	7	4	6	29
岩陰石積墓		4	1	4	2	11
岩陰掘込墓	1	6	2	1	1	11
掘込墓		9	11	10	2	32
仮墓	1	2		2	1	6
不明墓	8	56	21	26	10	121
合 計	12	87	42	47	22	210

2. 古墓の種類と特徴について

今回の悉皆分布調査で確認した古墓は、露頭する琉球石灰岩の岩陰や窪地を利用した岩陰墓とさらに横穴を掘り込んで造営した掘込墓（フィンチャー）に大別される。古墓は限られた範囲のなかで配置されており、比較的小規模な造りで墓室のみの単純な構造を呈している。そのため墓の規模に規則性はみられず、墓口を設けない造りも見受けられたほか、墓庭（庭囲い）を伴っていたのは一部であった。墓庭を設けなかったのは、造営された墓の立地に難があり庭の面積を確保できない地形的な制約のほか、墓を造る際に隣接する墓と墓の間を行き来する道も確保する必要があることや、仮墓として造営されている見方もあり一時的な墓として必要性がなかったことも推察される。

各墓の位置状況としては、段丘斜面や丘陵斜面に立地するという性質上、墓口の方に規則性が認められないことから地形にあわせて墓が造営されたものと推察される。しかし、墓の造営に時期差がある場合や墓造りの専門家（風水：フンシーミー）による方向の選定といった可能性も否定できない。また、古墓の殆どは、岩盤の崩落や土砂の堆積等による埋没があり、特に墓室に関して残存状態は良いとえないが幾つかの古墓では良好な状態で確認することができた。空墓を除き、現在も使用されている古墓や墓口に蓋がされたままの無縁とみられる古墓もあり、すべての墓室を測ることはできていない。但し、外観から見て取れる範囲では、墓室の面積は1㎡に満たないものが多く、それ以上の墓室面積を

有した古墓は比較的少なかったといえる。

上記の考察は、比嘉原地区やミーチェ地区でもみられた古墓の特徴（構造・立位・地形的制約）であり、当該調査でも認められた内容といえる。

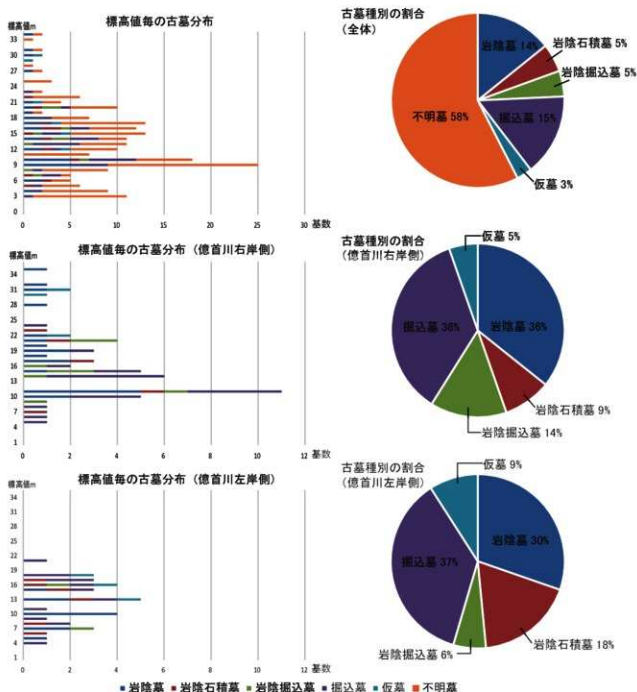
3. 古墓の種別と分布について

過去の調査成果を含め億首川流域古墓群で確認された墓遺構は主に岩陰墓と掘込墓で構成される。さらに両墓の構造から悉皆分布調査では岩陰石積墓、

岩陰掘込墓、掘込墓、仮墓、不明墓に細分した。以下、古墓の構成比を示すグラフと古墓が立地する標高値を比較したグラフを併せて整理し、考察する（表5. 2）。

古墓の構成比 当該調査で確認された古墓の種別割合を調査地区全体でみると、岩陰墓14%（30基）、岩陰石積墓5%（11基）、岩陰掘込墓5%（10基）、掘込墓15%（32基）、仮墓3%（6基）、不明墓58%（121基）になる。億首川下流

表5.2. 標高値毎の古墓の分布及び古墓種別の割合



域で認められた墓遺構は構造情報が断片である不明墓が半数以上を占めている。また、不明墓を除き古墓の種別割合を右岸地区・左岸地区でみると、右岸地区の古墓は、岩陰墓36%（20基）、岩陰石積墓9%（5基）、岩陰掘込墓14%（8基）、掘込墓36%（20基）、仮墓5%（3基）になり、左岸地区の古墓は、岩陰墓30%（10基）、岩陰石積墓18%（6基）、岩陰掘込墓6%（2基）、掘込墓37%（12基）、仮墓9%（3基）となった。上記から、右岸地区と左岸地区を比較すると、築造された岩陰墓、掘込墓に差はあまりみられないが、岩陰石積墓、岩陰石積墓では顕著に差（約2倍）がみられた。

古墓が立地する標高値 古墓が分布する場所を標高35～23mの台地縁辺部に属する墓域（上位）、標高22～13mの斜面中腹部に属する墓域（中位）、標高12～3mの斜面低地部に属する墓域（下位）を標高値で分けた。確認された古墓は斜面の中位（89基）と低位（105基）に多く分布し、斜面の上位（16基）は比較的少ない分布となっていた。また、不明墓を除き、右岸地区と左岸地区で古墓の分布をみると、右岸地区の古墓は斜面の中位（28基）、低位（21基）と多く、上位（7基）は比較的少ない分布であった。左岸地区の古墓は斜面の中位（14基）、低位（19基）が多く、上位（0基）については確認されていない。

次に古墓が分布する標高値の情報と古墓が立地する環境を併せると、右岸地区の古墓は琉球石灰岩の段丘斜面に立地し主に横に伸びた地形（等高線）に沿って分布するのに対して、左岸地区の古墓は国頭礫層や嘉陽層が基盤となり琉球石灰岩が不整合に分布する丘陵斜面に立地し主に石灰岩の不整合面に分布していることが認められる。以上のことから整理すると、古墓が分布する場所は、億首川下流周辺における地形の変化や分布する地質も墓を造る際の条件の一つとして示唆される。墓遺構の立地と分布については過去、比嘉原地区やミーチェ地区の古墓群調査でも見受けられた特徴でもある。

4. 古墓の前面構造と墓室形状について

自然地形を利用した岩陰墓や掘込墓は蔵骨器等を納める墓室の前面に石積みをして閉塞する単純な

構造である。億首川下流域周辺にて確認された岩陰墓や掘込墓などの遺構も同様の構造を呈している。これら遺構は概ね自然地形や人為的に掘込んだ開口部の内側で墓室を閉塞する構造と開口部の外側に張り出して閉塞する構造に分かれる（図5.1）。また、自然地形の岩陰や窪地をそのまま利用した墓室、さらに横穴等を掘り込み面積を確保した造りの墓室に分かれる（図5.2）。以下、確認された遺構の開口部における前面構造と墓室の床面形状を観察・整理し、考察していく。

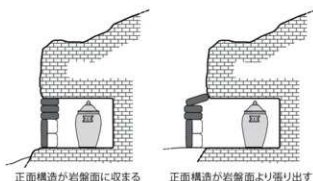


図5.1. 墓前面構造模式図

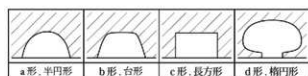


図5.2. 墓室床面形状模式図

前面構造 遺構が立地する自然地形や人為的に掘込んだ開口部の内側で墓室を閉塞するA構造14基、さらに開口部から前方向に張り出して墓室を閉塞するB構造9基が確認された（表5.3）。また、B構造9基の内3基については墓口から上に傾斜した平板状の屋根部が設けられ「平葺墓」の前面構造を形成しており、その様相から模倣した一例と見て取れる。

表5.3. 古墓前面構造の類別

前面構造	遺構番号（七区）	合計
A構造	M38・M41・M50・M53・M54・T03	15
	T06・T26・T28・T29・T30・T31	
	T32・T33・H28	
B構造	A01・M27・M42・M44・M47・T27	9
	H09・H36・H47	
	※A01・M44・M47 前面を平に広げた板石	

床面形状 岩盤の崩落や土砂の堆積により形状が不明な墓遺構を除き、自然地形をそのまま利用した墓室と人為的に掘り込んだ墓室で床面が判別できた古墓を対象に、a形（半円形）・b形（台形）・c形（長方形）・d形（楕円形）の形状に細分した。結果、墓室の床面形状が、a形12基、b形34基、c形8基、d形9基が確認された（表5.4）。

表5.4. 古墓床面形状の分類

床面形状	遺構番号（尸数）	合計
a形	M08・M16・M27・M39・M42・M61 M83M86・H19・H27・S14・S17	12
b形	A02・A07・M10・M12・M13・M34 M41・M43・M76・M78・M84・M85 T04・T08・T09・T16・T17・T18 T25・T34・T36・H02・H03・H10 H29・H34・H44・H47・S13・S15 S18・S20・S21・S22	34
c形	M24・M40・T20・H04・H07・H08 H12・H38	8
d形	A01・M35・M44・M47・M50・T03 T06・H47・S10	9

上記のことから考察すると、古墓の前面がA構造は開口部から内側に自然石を野面積みの手法で積み上げて墓室を閉塞する造りであるのに対して、B構造は開口部から外側に張り出して切石などを積み上げて墓室を閉塞する造りがみられた。また、B構造すべてに墓口が設けられているがA構造では墓口を設けていない古墓もあった。墓室の床面形状では、a形、b形は不規則な自然地形をそのまま利用し、c形は墓室内の四隅に面を造る規則性があり、b形は規則性があるというより立地する岩盤などの強度に影響を受けていたと推察される。

このことから古墓の前面構造には一定の規則性がみられるが、床面形状については、全体的に遺構の残存状態が悪く比較材料が少なかったこともあり改めて過去の成果も併せて比較研究を実施する必要性があろう。

5. 遺物について

陶製専用蔵骨器（厨子甕）を主に、荒焼（無釉）・上焼（施釉）の沖繩産陶器や本土産陶磁器などが確認された。蔵骨器は無頭甕形（ボージャー形）、有頭甕形及び外反甕形（いわゆる「マンガン（軸掛け）」）

ほか数タイプを確認したが地区によって分類別の出土傾向の差異を認める（表5.5）。

表5.5. 各地区の蔵骨器分類別出土傾向

調査地区	調査年度	無頭甕形 (ボージャー)	有頭甕形	外反甕形	備考
一志地区	-129~H31		○		
高城地区	-129~H31	○		○	
	-129~H31		○	○	有頭甕形、外反甕形
一志地区	-125・H26 (ミーチェ)	○	○	○	
飛留喜田地区	-129~H31		○	○	有頭甕形、外反甕形
施座地区	-129~H31 H20			△	

○：出土／△：部分出土

今回の埋蔵文化財予備調査で確認した厨子甕は大半が有頭甕形及び外反甕形で、無頭甕形（ボージャー形）タイプは宮城原地区のM86号墓（岩陰墓）で1点確認した。また、有頭甕形・外反甕形タイプは甘喜原・宮城原・田慶志原・飛留喜田原地区で確認できた。有頭甕形・外反甕形タイプは宮城原・田慶志原・飛留喜田原地区で多く確認でき、頸胸部付近のスリム化・文様装飾の簡略化等の特徴から有頭甕形よりも新しと考えられる外反甕形が比較的顕著である。有頭甕形タイプも屋門・文様装飾の簡略化が進んだものが多い。墓集中範囲3内にあるM86号墓（岩陰墓）から頭甕形（ボージャー形）を確認している。過去の調査を含めてもミーチェの古墓群での調査範囲で確認している。また、ミーチェの古墓群の調査では中国産の褐釉陶器が墓外で採集されており、その推定年代が15世紀後半～16世紀半ばであり、ミーチェの墓域の年代理解に有効な資料も得られている。

このことから少なくともミーチェの墓域がある田慶志原地区は15世紀後半から、ナグスクの墓域がある宮城原・については17～18世紀頃から墓域として利用されていたことが窺える。

6. まとめ

今回、徳首川流域古墓群の分布状況等について実態把握を目的とした悉皆分布調査を実施した。調査対象は、金武・並里集落から東方の段丘斜面（右岸）

及び中川集落から南西方の丘陵斜面（左岸）から過去調査した「ミーチェ」の古墳群や「ナグスク」の墓域も含む億首川下流域の広範囲であった。

確認された古墳群は、主に自然地形を利用した岩陰墓と掘込墓から構成され、標高18～8mの段丘斜面及び丘陵斜面（中位から低位）に多く分布していた。墓室は比較的小規模な造りで、主に開口部は石積で墓口を構築する単純な構造を呈していた。確認された遺物の年代観からみると、億首川流域周辺を墓域として利用するのは、近世初頭からはじまり、近代を経て現代に至り、墓域のなかには現在も使用している古墓もあった。

これまで蓄積された諸成果と併せて、今回の調査で確認された古墳群は、遺構が立地する環境、配置する場所、構造の形態など共通する一連の特徴もほぼ同様のものではあった。

引用・参考文献

（国・沖縄県刊行物）

- 文化庁文化財部記念物課監修・独立行政法人国立文化機構奈良文化財研究所編（2010）『発掘調査のてびき』同成社
- 環境省自然環境局 生物多様性センター作成（1999～2005）『現存植生図（第6～7回植生調査）』
- 「琉球国高究展」沖縄県沖縄史料編集所編（1981）『沖縄県史料 前近代1』沖縄県教育委員会
- 「上り松園郷村」沖縄県教育委員会編（1983）『琉球国絵図資料集第二集 元禄国絵図及び関連史料』
- 琉球国絵図史料編集委員会編（1993）『琉球国絵図史料集第二集 元禄国絵図及び関連史料』沖縄県教育委員会
- 沖縄県企画部市町村課編（2020）『市町村別概要（19、金武町）』
- 『沖縄県市町村概要（令和2年3月）』
- 沖縄県立博物館・美術館（2008）『ずしがめの世界』
- 沖縄県立博物館・美術館（2015）『平成27年度沖縄県立博物館・美術館特別展 琉球の御墓制—風とヤシのちのち—』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編（2001）『ヤツチのガマ・カンジン原古墳群—黒宮かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編（2005）『沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡（I）—埋蔵文化財予備調査（表層踏査）報告—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第31集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編（2013）『宮国元島上り古墳群—に伴う発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第66集
- 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編（2003）『沖縄県史 各論編 第二巻 考古』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化財課史料編集室編（2019）『沖縄県史 前近代1』沖縄県教育委員会
- 琉球政府編（1965）『沖縄県史 資料編4第14巻 雑纂1』

7. おわりに

これまで億首川流域周辺で実施した悉皆分布調査や発掘調査では、古墳群の構成や分布状況について一定の成果を得ることができた。古墳群が持つ情報は、近世・近代期における文献資料が少ない金武町の墓制や葬法を考える上で貴重な遺跡資料といえる。しかし、当該調査および比嘉原地区やミーチェの古墳群は、億首川流域全体の断片的な一例であり、古墳群の全容解明には至らず、残された課題も多いといえる。今後、金武町内において埋蔵文化財調査等が計画され時に、これら億首川流域古墳群の普遍的な調査資料が基礎資料として役割を持つとともに、周辺地域における独自の葬墓制を考察する上でも貴重な考古学的資料になると思われる。

- 琉球政府編（1966）『沖縄県史 資料編2第12巻 沖縄県関係各省公文書1』国書刊行会
- 琉球政府編（1967）『沖縄県史20 沖縄県統計集成』
- 沖縄県総合事務局北部ダム事務所編（1998）『億首川生物環境調査データ』
- 沖縄県（2014）『億首川水系河川整備計画』

（金武町関係）

- 金武町教育委員会編（1982）『金武町道路概要書』
- 金武町誌編纂委員会編（1983）『金武町誌 金武町役場』
- 金武町教育委員会編（1990）『金武町の道路—道路詳細分布調査報告—』金武町文化財調査報告書第1集
- 金武町教育委員会編（1993）『金武町億首川マングローブ調査報告書』
- 金武町誌編纂委員会編（1994）『金武町誌 戦前編』（上・下巻）金武町事務所
- 並里区誌編纂委員会編（1998）『並里区誌 戦前編』並里区事務所
- 金武町教育委員会編（2010）『町内埋蔵文化財予備調査報告書—億首川周辺（平成18～20年度）—』金武町の歴史と文化第4集
- 金武町教育委員会編（2011）『奥首の交通遺跡群—億首川流域古墳群比嘉原地区・幸地原の炭地遺跡—億首ダム建設事業（本体工事区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』金武町の歴史と文化第5集
- 金武町教育委員会編（2012）『スーシン小探訪 金武町の歴史と文化6集』
- 徳島大学工学部建設工学科生態系管理工学研究室編（2016）『億首川の自然ハンドブック1 汽水域・マングローブ林内のハゼ類』金武町教育委員会
- 徳島大学工学部建設工学科生態系管理工学研究室編（2016）『億首川の自然ハンドブック2 汽水域・マングローブ林内のカニ類』金武町教育委員会
- 金武町教育委員会編（2018）『町内埋蔵文化財予備調査報告書II』

平成21～27年度町内遺跡発掘調査等一徳首川下流周辺・ギンバル訓練場跡地内埋蔵文化財予備調査ほか一』金武町の歴史と文化第7集

金武町教育委員会編 (2019)『ミーチェの古墳群 徳首川流域古墳群ミーチェ地区一国道329号金武バイパス (2工区) 建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』金武町の歴史と文化第8集
金武町役場企画課 (2019)『2019年金武町町勢要覧』金武町役場

〔市町村・地域史誌関係・大学等〕

浦添市教育委員会編 (1994)『内間西原子墓群一都市計画道路工事に伴う緊急発掘調査一』浦添市文化財調査研究報告書第22集

浦添市教育委員会編 (1997)『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者一近世墓の考古学的調査による家族復元一』浦添市文化財調査研究報告書第25集

浦添市教育委員会編 (2007)『市内遺跡発掘調査報告書 (1)一平成13～18年度調査報告一』浦添市文化財調査研究報告書

浦添市教育委員会編 (2007)『仲間後原遺跡 仲間あさと原の印部土手 浦添大公園整備発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』浦添市文化財調査研究報告書

浦添市教育委員会編 (2007)『前田・経塚近世墓群 浦添南第一土地区画整理事業に伴う発掘調査報告1』浦添市文化財調査研究報告書

浦添市教育委員会編 (2017)『前田・経塚近世墓群9 下平良大名家原A丘陵 浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書』浦添市文化財調査報告書

浦添市教育委員会編 (2017)『城間東空寺古墳群一県道浦添西原線 (浜川～城間) 道路改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』浦添市文化財調査研究報告書

今帰仁村教育委員会編 (2009)『なきじん研究』第16号

今帰仁村教育委員会編 (2013)『運天古墳群 I一村内遺跡発掘調査報告一』今帰仁村文化財調査報告書第33集

那覇市教育委員会 (1998)『銘苅古墳群 (I)一那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告V一』那覇市文化財調査報告書第39集

那覇市教育委員会 (1999)『銘苅古墳群 (II)一那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告VI一』那覇市文化財調査報告書第40集

那覇市教育委員会 (2001)『銘苅古墳群 (III)一那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告IX一』那覇市文化財調査報告書第50集

那覇市教育委員会 (2001)『安謝西原古墳群一那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告X一』那覇市文化財調査報告書第51集

沖縄県地域史協議会編 (1989)『南島の墓 沖縄の葬制・墓制』沖縄出版

沖縄県地域史協議会編 (2009)『地域史叢書 沖縄の印部石』

那覇市企画部市史編集室 (1976)『那覇市史 資料篇第1巻5 家譜資料 (一)』

那覇市企画部市史編集室 (1982)『那覇市史 資料篇第1巻7 家譜資料 (二)』

那覇市企画部文化振興課 (1989)『那覇市史 資料篇第1巻10 琉球資料 (上)』

那覇市立壺屋焼物博物館 (2006)『那覇市立壺屋焼物博物館企画展 銘苅古墳群一蘇った先祖の眠る大地一』

名護博物館編 (1991)『屋部地区の墓』名護市墓分布形態調査報告書・2

〔単行本〕

伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編 (1940)『琉球史料叢書 第1巻』

伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編 (1940)『琉球史料叢書 第3巻』

小野武夫編 (1958)『近世地方経済資料』第9巻

小野武夫編 (1958)『近世地方経済資料』第10巻

琉球研究会編 (1974)『琉球 読み下し編』角川書店

名嘉真宜勝 (1999)『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社

原田禹雄 (1999)『中山伝信録 新訳注版』榕樹書林

外間守善・波照間永吉 (2002)『定本おもろさうし』角川書店

沖縄県考古学会編 (2018)『南島考古入門一掘り出された沖縄の歴史と文化』

〔論文・レポート〕

高良倉吉 (1987)『古時代とグスク時代』『地域と文化』第13・14号

津波高志 (1994)『金武町の村落と聖地一金武区と並里区の場合一』金武町教育委員会

池原隆 (2010)『徳首川周辺と海上交通』『町内埋蔵文化財予備調査報告書一徳首川周辺 (平成18～20年度)一』金武町の歴史と文化第4集

上原静 (2018)『沖縄諸島における厨子文化と葬墓制 (3)一古墳の造形と厨子一』『南島考古』第37号 沖縄考古学会

豊見山和行 (2018)『琉球史における時代区分論一時代名称・歴史概念の再検討一』『琉球史学』第20号

宮城弘樹 (2018)『グスク時代の枠組みと時代区分の課題』『琉球史学』第20号

附編 1 億首川下流域埋蔵文化財予備調査—緊急調査の記録—

M50号墓

M50号墓は、平成25（2013）年に台風による斜面地崩落箇所の災害復旧工事（宮城原霊園内園路法面改修工事）に伴い緊急記録調査を2月下旬～3月上旬に実施し記録した墓遺構である。

当遺構は、露頭する石灰岩の段丘斜面に横穴を掘り込んで墓室を構築した掘込墓である。墓前面は石灰岩の礫石を積み上げて墓室を閉塞し中央部には墓口を設けていた。蓋石は石灰岩を加工した切石を確認したが町教委が確認した時点で蓋石は開いていた。墓室はドーム状に構築されており、床面形状は

楕円形を呈していた。奥壁には蔵骨器を設置するタナ（棚）が1段設けていた。また、墓正面及び側壁の石積みには漆喰が塗られており、表面は比較的綺麗に整形されていた。墓室内の側壁にも漆喰が確認できたが、奥壁や床面、天井部には見られなかった。

遺物については、墓前から施釉陶器片1点、墓室内から人骨7点（臼歯1点、小砕片6点）を採集した。

遺構周辺では、東側にM44号墓、北側にM33号墓が確認されている。

表6.1. M50号墓 遺構観察表

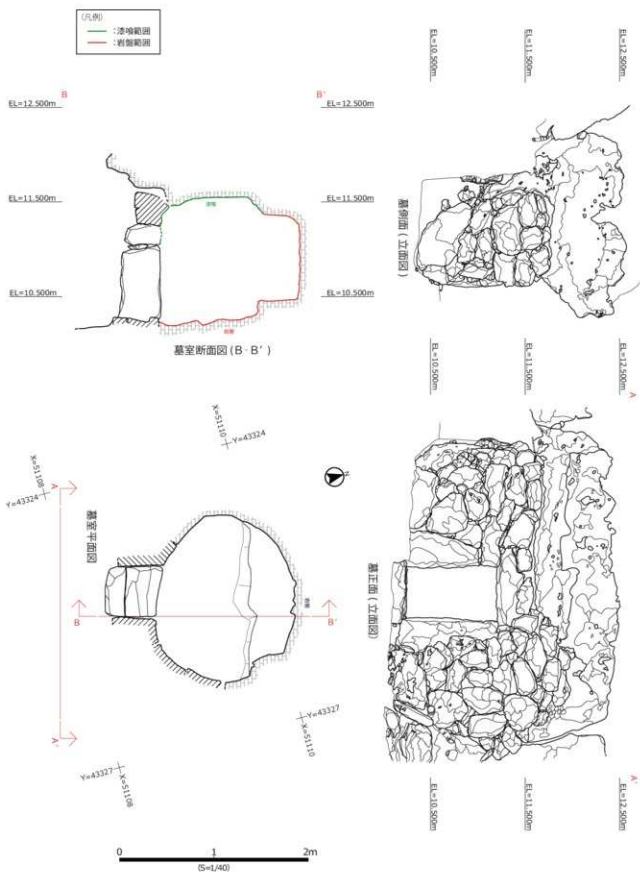
古墓の分類	掘込墓	古墓の位置（グリッド）	O18
立地	丘陵縁辺下部に近い斜面	墓口の向き	南西
規模	(墓口) 幅0.50m/高さ0.98m/奥行0.60m (墓室) 幅1.76m/高さ1.30m/奥行1.46m (墓庭) 幅一/長さ一		
遺物	(墓室内) 人骨小破片 (墓室外) 沖繩産施釉陶器片（蓋の摘み部分）		



写真6.1. M50号墓

123. M50号墓 遺調査着手前状況
125. M50号墓 漆喰除去作業

124. M50号墓 遺構検出状況
126. M50号墓 石積除去状況



附編2 億首川流域の変遷

1. 億首川の環境

億首川は沖縄本島中央部の国頭郡金武町および恩納村に位置している。その源は恩納村喜瀬武原北方の標高約150mの山中に発し、喜瀬武原盆地を南方に貫流しながら長浜川や幸地川等の支川と合流して字金武集落において太平洋に注いでいる。流路延長は約8km、流域面積は約16.4km²あり沖縄県では平成4（1992）年に二級河川へと指定された。

河川名の億首川が固有の名称でいつから表記されるようになったのかは定かでない。過去には、金武川、福花川の名称記載も散見された。土地の古老は比謝川と称した。昭和29（1954）年に米軍が作成した地図には「HIKA-GAWA」の名称がみえる。河川流域にある比嘉原との関わりが窺える。また、億首橋がある地域が億首原であることに留意すれば「河川のくびれた場所」に由来する名称と考えたと「億首」は「奥首」の誤記ではないかとの説もある。

億首川流域の森林植生は、自然林と二次林に区分される。環境省が作成した現存植生図（第6・7回）によると、流域周辺の植生はリュウキュウマツ群落が多くを占め、山地部や谷斜面では、ギョクシンカースダジイ群集・ボチョウジイジュ群落などもある。下流域から河口部には、ナガミボチョウジヤブニッケイ群落・ハドノキウラジロエノキ群団（二次林）のほか、モクマオウ類植林などもみられる。

また、下流域は生物の多様性が高く学術的にも貴重であることから環境省の「日本の重要湿地」とし

て選定されている。同地域には、本島ではここで見ることが出来ない4種類のマングローブ（オヒルギ・メヒルギ・ヤエヤマヒルギ・ヒルギモドキ）が自生している。さらに、渡り鳥の飛来地として約30種類の鳥を観察することができる貴重な自然環境が形成されている。

億首川的主要な建造物は、河口から約3kmの上流地点に世界初の台形CSGダム工法を適用した金武ダムが平成24（2012）年に完成した。本土復帰以降、沖縄県内には、多目的ダムや海水淡水化施設などの建設が進められてきた。その内、ダム施設から上流域に集落（金武・恩納村喜瀬武原集落＝以下、喜瀬武原集落とする）が立地するのは億首川のみの特徴といえる。



写真6.3. 下流から金武ダム堤体を望む

2. 億首川の変化

億首川の上・中流域は、金武・恩納の喜瀬武原集落および金武ダムを除いて、その大部分が米海兵隊施設キャンプ・ハンセンとして提供されている。一方、河川流域の周辺では、土地の区画整理や河川改修に伴って流路が変更されたほか、河口を含む海岸付近には護岸や港などが整備されたことで河川環境が大きく変化していく様子が窺える。

本章ではこれら河川流域における経年変化を「下流域地区（河口から億首橋付近までの1.6km区間）」「中流域地区（金武ダムから喜瀬武原盆地南方付近までの1.6～4.0km区間）」「上流域地区（喜瀬武原盆地から水源地までの4.0～8.0km区間）」に区分



写真6.2. 億首川河口付近から上流を望む

して、地図資料や空中写真をもとに土地利用の変化や社会的状況の変遷を図に示した。

大正10(1921)年 旧日本陸軍参謀本部の陸地測量部が測量した時期に億首川の流れを変更するような開発行為は文献資料等からも確認はできていない。地図資料の精度上、流域における開発行為などは判読できない部分がある。明確ではないが地図からみる、この時代の億首川は、改変がない自然河道の環境があったと思われる(図6.2)。

昭和20(1945)年 1945年に米軍が撮影した空中写真を見ると、億首川の「下流域地区」では、河口付近に湿地環境が形成され、現在よりも入江が陸地にはり込み河川は大きく蛇行している。河川一帯の陸地には田畑が広がり、昭和10(1935)年頃に埋め立てて作った水田(ミーガタ)や護岸整備の跡のほか、上流域には昭和6(1931)年に架けられた旧億首橋がみられる。河川域にはマングローブ林もみられるが現在のような植生の広がりはない。「中流域地区」では、フクジと称される山間の平地

に田畑が広がり山斜面には段々畑としての土地利用もみられる。また、フクジを流れる幸地川と億首川が合流する付近には馬車道も通っている。「上流域地区」では、四方を山々に囲まれた盆地状の地形に喜瀬武原集落が立地し、田畑が広がる地区である。この地区を億首川は田畑の中央部を流れて蛇行を繰り返して、集落の東方では長浜川が金武・恩納との字界に沿って流れ、億首川と合流する。また、周辺の山地部では谷から尾根にかけて山道が縦横に巡り、斜面地では広い範囲で木々の伐採された痕がみられる(図6.3)。

昭和49(1974)年 昭和20(1945)年の空中写真と比較すると「下流域地区」では、昭和50(1975)年から並里区土地改良事業の実施に伴い干潟が埋め立てられて農地の区画整理がおこなわれている。河口から億首橋付近までは、堤防が整備(右岸・左岸)され、福花橋が掛けられている。河川頭上には県道329号が横断するほか、昭和23(1948)年頃に整備された導水橋もみられる。マングローブ林は現在

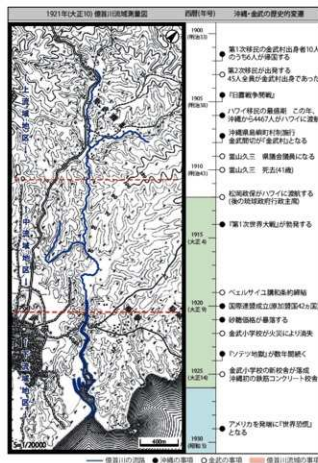


図6.2. 億首川の流路及び社会的変遷 (1)

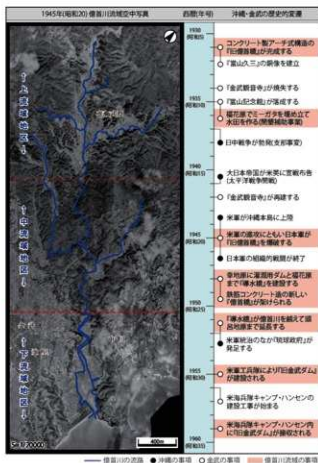


図6.3. 億首川の流路及び社会的変遷 (2)

とはほぼ同じ位置でみることができる。「中流域地区」では、昭和36（1961）年に米軍によって建設された金武ダムが立地する。ダムの頭上には沖縄自動車道が横断する。ダム周辺の山地部では、米軍基地開発に伴い広い範囲で木々の伐採された跡がみられる。「上流域地区」では、昭和45（1970）年から喜瀬武原農業構造改善事業として農地の区画整理がおこなわれ、集落内を流れる億首川も改変されて直線化となる。周辺の山地部では、森林の面積の増加がみられる。米軍基地内としての特殊な環境も鑑みながら、この頃には林業の生業があまりみられなくなったことも窺える（図6.4）。

平成30（2018）年 昭和51（1976）年の空中写真と比較すると「下流域地区」では河口部の緑地にネイチャーみらい館（体験型宿泊施設）と港が整備されている。対岸のギンバル訓練場跡地では開発が進められ、競技施設や医療関係の施設等が建ち並んでいる。これまで架けられていた福花橋と平行して新たに新福花橋、さらに上流にはヒルギ橋が架け

られ、その頭上を平成31（2019）年に全線開通した金武バイパスが横断する。マングローブ林内には、全長280mの遊歩道が整備された。河口に近い場所ではマングローブ林が広がる。「中流域地区」では、米軍建設の金武ダム（沖縄県企業局管理）が再開発により、湛水面積も増え、ダム周辺には外周道路と富名田橋が架けられた。「上流域地区」では行政、民間、米軍基地などの開発行為に伴う変化はみられない。また、周辺の山地部では、1970年代と比べ森林の密度が更に増えているといえる（図6.5）。

3. おわりに

明治期以降、近代化が進み社会が変化する過程において億首川もその様相を変えてきた。河川は時代に合わせて「治水」で水害の被害から人々の生活を守り、「利水」によって人々の生活を発展させてきたといえる。近年の億首川では「自然環境」に配慮した生態系保全対策や公園緑地の整備を促進し、自然と調和した町づくりの推進がおこなわれている。

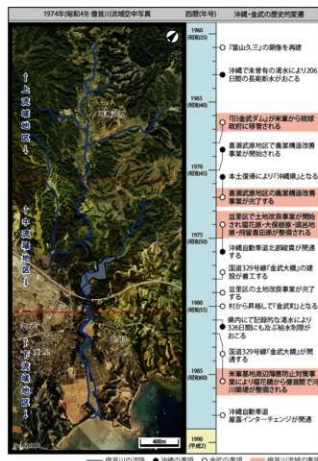


図6.4. 億首川の流路及び社会的変遷（3）

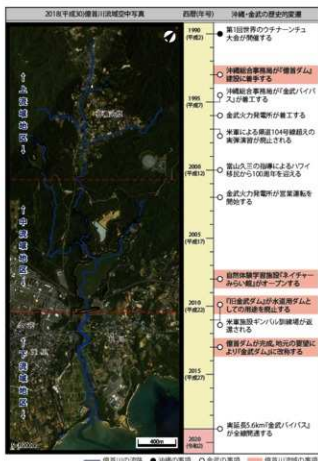


図6.5. 億首川の流路及び社会的変遷（4）

国土地理院 web サイトからダウンロードした空撮画像を加工



写真6.4. 信首川流域に架かる主な橋梁

- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| 129. 福花橋（河口付近） 信首川下流域地区 | 130. ヒルギ橋 信首川下流域地区 |
| 131. 旧信首橋 信首川下流域地区 | 132. 富名田橋（全武ダム） 信首川中流域地区 |
| 133. 信首川（左）・長浜川（右） 信首川上流域地区 | 134. 橋一号橋 信首川上流域地区 |
| 135. 長浜橋 信首川上流域地区 | 136. 中又橋 信首川上流域地区 |

報告書抄録

ふりがな	ちょうないまいどうぶんかざいよびちょうさほうこくしょ								
書名	町内埋蔵文化財予備調査報告書Ⅲ								
副書名	平成29～令和2年度 町内遺跡発掘調査等 億首川流域古墓群悉皆分布調査								
巻次	－								
シリーズ名	金武町の歴史と文化								
シリーズ番号	第9集								
編著者名	岸本卓己・仲本祥太・川島 淳・安座間 充・玉元孝治・玉城奈緒 平島義孝・青木翔太郎								
発行機関	金武町教育委員会								
所在地	〒904-1201 沖縄県国頭郡金武町字金武7758番地(☎098-968-8996)								
発行年月日	2021年(令和3年)3月19日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
億首川流域古墓群	字金武 小字甘喜原	47314	－	26° 27′ 44″	127° 55′ 56″	2019/05/29 ～19/09/30	約8,700㎡	埋蔵文化財分布 調査実施のための 予備調査	
	字金武 小字宮城原	同上	－	26° 27′ 38″	127° 56′ 04″	2017/06/30 ～18/03/16	約28,200㎡	同上	
	字金武 小字田慶志原	同上	－	26° 27′ 31″	127° 56′ 06″	2017/06/30 ～18/03/16	約10,100㎡	同上	
	字金武 小字飛留喜田原	同上	－	26° 27′ 42″	127° 56′ 08″	2018/06/29 ～19/03/15	約21,400㎡	同上	
	字金武 小字頭呂地原	同上	－	26° 27′ 39″	127° 56′ 15″	2018/06/29 ～19/03/15	約7,100㎡	同上	
	遺跡種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
	墓	近世～ 近現代	掘込墓・岩陰墓 古墓・石積・里道		蔵骨器・蔵骨器転用品 沖縄産陶磁器 本土産陶磁器				
	要 約	本報告書は、金武町教育委員会が文化庁国庫補助を受けて『億首川流域古墓群悉皆分布調査』の調査成果を収録したものである。 金武町字金武小字甘喜原、宮城原、田慶志原、飛留喜田原、頭呂地原に所在する複数の墓群を総称して億首川流域古墓群とよんでいる。平成29年から平成31(令和1)年まで継続的に実施した分布調査では、億首川下流域兩岸の琉球石灰岩の段丘状崖面や丘陵地一帯に、掘込墓や岩陰墓など、合計210基の墓が確認された。出土品は、蔵骨器や蔵骨器転用品のほかに、沖縄産の甕や香炉、本土産陶磁器などが確認されており、これら遺物の年代から当該地区の古墓は近世から近現代にかけて造営され続けていたと考えられる。 本調査で確認された古墓の殆どが「空墓」であるため、各墓の造営時期や利用状況に関する詳細な情報は断片的ではあるが、分布調査によって億首川流域における墓域の年代理解に資する考古的資料を得られたほか、当該古墓を含めた金武町内における造墓習俗の特徴を考える上でも重要な調査記録となった。							

北緯・東経は、甘喜原A09号墓、宮城原M49号墓、田慶志原T21号墓、飛留喜田原H31号墓、頭呂地原S16号墓の位置座標

金武町の歴史と文化 第9集

町内埋蔵文化財予備調査報告書Ⅲ

平成29～令和2年度 町内埋蔵文化財予備調査等

一億首川流域古墓群悉皆分布調査一

発行年 2021（令和3）年 3月 19日

編集・発行 金武町教育委員会
〒904-1201 沖縄県国頭郡金武町字金武7758番地
電話098-968-8996（社会教育課）

印刷 株式会社東洋企画印刷
〒904-1201 沖縄県糸満市西崎町4-21-5
電話098-995-4444